

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 廣田 緑

論 文 題 目

インドネシア現代美術と美術家～つくる・買う・支援する主体をめぐる民族誌～

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学	教授	阿部 泰郎
委員	名古屋大学	教授	栗田 秀法
委員	名古屋大学	准教授	東 賢太郎
委員	金沢大学	教授	鏡味 治也

【本論文の概要】

本論文は、インドネシアにおけるスニ・コンテンポレル（現代美術）の成立と展開をふまえつつ、現代美術の制作者である美術家、作品を購入するさまざまな蒐集家、近年出現した「アートマネジメント」の実践者にそれぞれ焦点を当てた民族誌的記述をおこなうとともに、インドネシア現代美術史におけるこれら行為主体の動向と推移の考察をとおして、現代美術が持ち得る社会的・政治的意義を再考したものである。

序章ではまず、これまでのインドネシアの現代美術を主題化した研究と、インドネシア以外の地域も対象に含めた人類学、芸術社会学における芸術研究の議論が批判的に再検討され、問題の所在と本論文における目的と構成が示される。

第1章では、インドネシアの歴史的、地理的、政治的背景の概観の後、インドネシア史上初のインドネシア人による美術史編纂書として1979年に刊行された『インドネシア美術史』に依拠しつつ、先史時代から第二次世界大戦前後までの美術史と、近現代美術の画期となった「プルサギ」運動について詳述される。

第2章では、近現代美術の成立と展開、とくにオランダ植民地時代に西洋美術の教育を受けた画家が登場し、国家独立の前後には独特のモダニズムが生まれたこと、バンドン工科大学、ジョグジャカルタ芸術院などの開設とともにアートインフラの近代化と地域ごとの美術活動の活発化がみられ、それらの中から現代美術の嚆矢である「新美術運動」と、最初の現代美術画廊であるチムティが登場したことが明らかにされる。

第3章では、現代美術の作家、バリ伝統絵画の画家、観光地の「土産物絵画（装飾絵）」の製作者の、それぞれの制作活動の実態とその美術認識が示されるとともに、ライフヒストリー研究の手法により、現代美術の作家の一人、ハンディウルマン・サプトラ氏の事例をとおして、作家を取り巻く政治的背景や美術をめぐる市場経済の動向が変動する中で、作家が創造性や感性を磨き続けてきたことが示される。

第4章では、現代美術の蒐集家に焦点が当てられ、美を愛でるために作品を購入する「神聖な蒐集家」、作品をもっぱら投資の対象として扱う投資家に加えて、現代美術が市場ブームを呼んだ時期以降には「アート・ラバー」と称される新しいタイプの蒐集家が登場し、アートインフラが多様な方面で充実していったことが指摘される。

第5章では、さらにヘリ・ペマッド・アートマネジメントの事例をとおして「アートマネジメント」の実践者の新たな出現が詳述され、それが行政主導とは異なった「ワイルドな」、つまり自由奔放な民間主導型で展開しつつあることが示される。

第6章では、これまでの記述をふまえた総合的な考察がおこなわれ、インドネシア現代美術が常に新旧の価値観をめぐる闘争の場であり、現実の社会・政治問題と向き合い、民衆の代弁者となって社会を変革していく力を秘めてきたことが指摘される。

終章では、これまでの議論を総括するとともに結論が提示される。そのうえで、美術と社会のより緊密なつながり方として、「社会関与型美術」の可能性が指摘される。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、インドネシアの現代美術史を詳細かつ包括的に提示したものとして、世界でも初めての業績とあってよく、まずこの点で高く評価できる。バリ舞踊など一部の「伝統芸能」をのぞき、インドネシアの美術、とくに現代美術に関してはこれまで詳細な報告や論考が乏しく、一般によく知られているとはいいがたい。本論文は、インドネシア現代美術の歴史と現状、作品と作家をはじめとするアートワールド(Danto 1964)、アートインフラに関する豊かな知見に満ちており、インドネシア現代美術を対象とした人類学、芸術社会学はもとより、美術史学、博物館学、アートマネジメント研究の分野にも相応の貢献をもたらす、学際的にも貴重な業績である。

また、本論文はインドネシアにおける美術概念の周到な検討とともに、同国において現代美術は常に闘争の歴史を歩んできたこと、美術家たちの闘争の相手はオランダ植民地政府、オランダ人がつくりあげたオリエンタリズム、独裁的なスハルト政権、商業主義と資本主義へと移り変わってきたが、美的関心と商業的関心が常に拮抗する美術市場を生き抜きながら、社会に向けてメッセージを発信し続けてきたことを実証的に示すことに成功している。したがって、これまで一貫して社会との接点を重視してきた現代美術が、わかりやすい闘争相手がなくなった現在、その社会との関わり方をこれまでになく多様化、多極化させつつ模索しているとの考察も説得力がある。

さらに、本論文の特長として、論者自身が現代美術家であり、1994年以降、のべ16年間にわたってインドネシアのアートワールドに身を置いて活動してきたがゆえに、通常の参与観察では得がたい「深い」情報や、美術家たちの意識や感性に共感した記述を提示している点もあげられる。人類学における民族誌の記述をめぐっては、とくに1990年代以降、その客観的妥当性や、書く者と書かれる者(調査対象者)の間に横たわる表象上の特権、政治経済上の力学をめぐる不均衡性が問題視され、それらへの反応として実験的民族誌や一人称民族誌などさまざまな試みがなされている。本論文もまた、これらの課題を積極的に乗り越える試みのひとつとして位置づけることができるが、とくに美術家自身による美術を扱った民族誌、人類学的研究としてはわが国でも他にあまり類例をみない先駆的業績であり、この点でも高く評価できる。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。論者自身が現代美術家であるがゆえに持ち得る利点は、同時に不利にも働き得る。美術家としての感覚で理解できた内容は、今後なお相対化の余地を残す。同じく論者がキーワードとする感性という語も、概念上の一層の精緻化が求められる。また、とくに日本美術史との比較検討をつうじた考察の深化も今後の課題といえる。ただし、これらはいずれも今後の研鑽によって克服が十分に期待できるものであり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判定した。